

# 看護基礎教育におけるラベルワーク 技法導入に向けての実践と評価

井上 千晶・石橋 照子・飯塚 雄一・吾郷美奈恵  
高橋恵美子・井山 ゆり・飯塚 桃子

## 概 要

我々は、主体的にものごとを捉え、創造的に思考し、実践できる能力を持った看護師を育成するために、看護基礎教育において、コミットメント能力や自己評価能力を高める参画型の教育・学習方法を検討している。

今回、その一方法としての「ラベルワーク技法」を用いた参画型研修会を企画・実施し、実施状況や研修後アンケートにより研修会の評価を行った。その結果、ラベル図考のテーマや時間設定等に課題が残ったが、研修会は有意義であり、ラベルワーク技法の今後の導入につながるものであった。

キーワード：看護基礎教育, コミットメント (参画), ラベルワーク

## I. はじめに

今日の医療現場において患者参画型の医療・看護が推進されている中で、その担い手である看護師も主体的にものごとを捉え、創造的に思考し、実践できる能力を持つことが求められている(夏目他, 2004)。

われわれも、そのような背景を踏まえて、コミットメント能力(参画する能力)や自己評価能力を育てることを目指しているところである。今回、参画型教育の一方法として提唱されている「ラベルワーク技法」について看護教育や臨床指導への導入を検討するため、「看護基礎教育においてコミットメント能力と自己評価能力をどう育てるか」をテーマに参画型の学習を体験することを目的とした研修会を企画・開催した。ラベルワーク(Label Work)とは1995年頃から林(林, 2004)が用い始めた名称であり、「人間の知的活動、とりわけ知識の発信交流、および(知識生産のための)図解思考の道具(媒体)としてラベルを用いる理論と技術の体系である」と定義しているものである。今回、看護基礎教育におけるラベルワーク技法導入に向けての実践内容とアンケートによる評

価についてまとめた。結果、時間配分のまずさや、ワーカーの未熟さなどにより検討課題もみられたが、今後活かせる教育方法として手応えを得たので、報告すると共にラベルワーク活用の可能性について検討し考察する。

## II. 研修会の概要

### 1. 参画型研修会の企画・運営

#### 1) テーマと目的

##### (1) テーマ

「看護基礎教育においてコミットメント能力と自己評価能力をどう育てるか」

##### (2) 目的

① ワークショップにおいて看護基礎教育におけるコミットメント能力と自己評価能力を育てる教育方法を検討する。

② ワークショップを体験することにより、参画型教育を目指したラベルワーク技法を習得する。

#### 2) 研修会の内容

(1) 日程；平成17年8月9日～10日の2日間

(2) 参加者；看護教員(短期大学, 専門学校, 大学), 臨地実習指導者(看護師)28名。

3) ラベル図考のテーマ設定；事前に講師とと

もに検討を重ね、以下の5つのテーマに決定し、参加者に提示した。参加者には当日自分で選択してもらうようにした。

- ①「相互に成長できる教育を実現するためにはどうすればいいか」
  - ②「効果的なカンファレンスを実現するためにはどうすればいいか」
  - ③「学生主体の実習にするにはどうすればいいか」
  - ④「学生の学びを統合する実習にするにはどのように行えばいいか」
  - ⑤「一人ひとりが自己発揮できる職場組織にするにはどうしたらいいか」
- 4) 会場準備；講師の指示のもと、一つの教室に1グループ5～6人とし、5グループ分の机と椅子を講義も聞きやすいように配置した(写真1)。各グループに白板と磁石を準備した。教室の外には講師の持参した「ラベル新聞」や「ラベル図解」を展示し、参加者が作品をイメージしやすいようにした。
- 5) ラベルワーク準備；各色の厚紙を「大皿」

「中皿」「小皿」と使用するためにあらかじめ大・中・小の大きさに切り分けた。

ファシリテーター(ワーカー)の配置；研修会前日に、各テーマに一人以上ファシリテーターとして検討会のメンバーを配置した。テーマは各自がイメージしやすいものを選んだ。

- 6) ゲストの配置；講師が今回の研修会参加予定者の他にゲストを配置した。

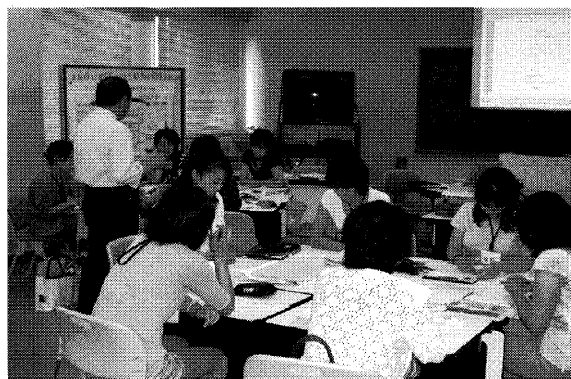


写真1 研修会場の配置

## 2. 参画型研修会の実施

- 1) 研修プログラムと研修中の様子  
2) 2日間の研修プログラム(表1)。講義と

表1 研修プログラム

8月9日〔1日目〕		研修内容	書いたラベル
午前 (9～12時)	講義	「看護実践能力の育成の課題とラベルワーク-成長し続ける看護師に必要な力とは」(25分) 「学生参画授業入門Ⅰ」(15分)	①先ラベル「今の気持ち」 ②感想ラベル「講義を聞いて」
	演習準備	あらかじめ決めていた5つのテーマ毎にチームを編成(1チーム5～6人) 学生参画授業の基幹ツールとしてのラベルワーク技法 (1) ラベルワークすすめ方の説明(15分)	
	演習	(2) 元ラベルを書く(15分) ラベルあわせ、小皿、中皿作り(100分)	③感想ラベル「小皿を仕上げて」
午後 (13～18時)	演習準備	(3) 縮小版の作り方の説明 (4) ラベル新聞の作り方の説明	
	演習	看板作り、ラベル図考、ラベル図解(150分) 発表会準備、縮小版作成(60分) 発表会(60分)	④感想ラベル「発表会を終えて」 ⑤後ラベル「1日を終えて」
時間外		ラベル①～⑤についてラベル新聞づくり	

8月10日〔2日目〕			
午前 (9～12時)	演習	チームメンバー相互交換Ⅰ(インタークロス)(40分) チームメンバー相互交換Ⅱ(40分) ラベルトークⅠ(15分)	①先ラベル「今の気持ち」 ②テーマラベル「チームで共有したいこと」
	講義 演習	学生参画授業入門Ⅱ(75分) ラベルトークⅡ(15分)	③感想ラベル「講義を聞いて」
午後 (13～15時)	講義 質疑応答	参画型看護教育とは(50分) 今後の活用について(60分)	④感想ラベル「講義を聞いて」
時間外		ラベル図解の修正、完成 各グループラベル新聞作成「研修会を終えて」	

演習を組み合わせ、参加者は時間外も熱心に取り組んだ(写真2, 3, 4, 5)。



写真2 ラベル合わせ

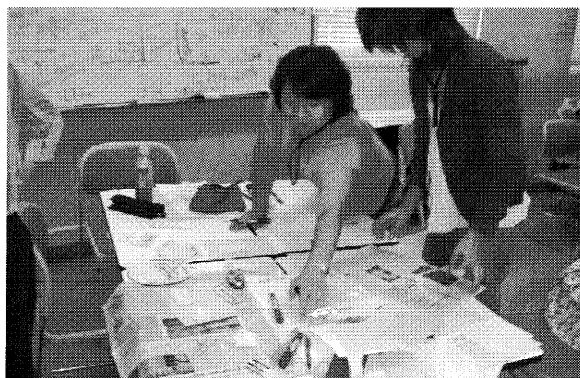


写真3 ラベル図解作成



写真4 ラベル図考についての指導

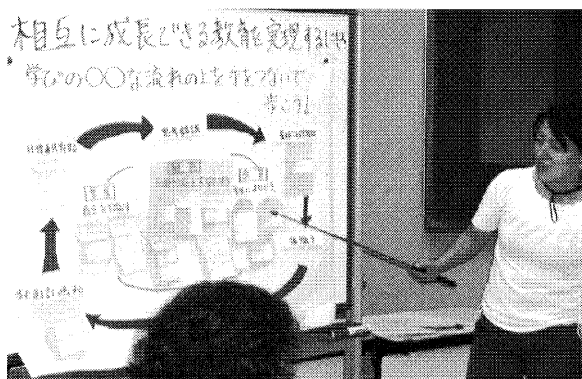


写真5 発表会

## 2) 研修の成果・作品

研修の成果・作品としてラベル図解を行っ

た(写真6, 7)。



写真6 ラベル図解・成果(1)

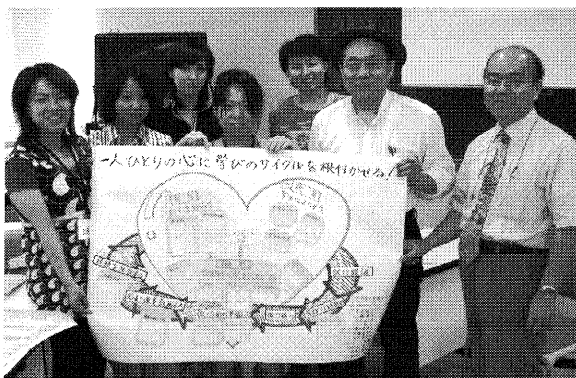


写真7 ラベル図解・成果(2)

## 3) 研修会終了後

図解の縮小版とラベル新聞(図1)をポートフォリオに収め研修会の学びの整理とし、それらを学外の参加者と講師にコピーし、郵送配布した。

## 3. 参画型研修会の反省・伝達

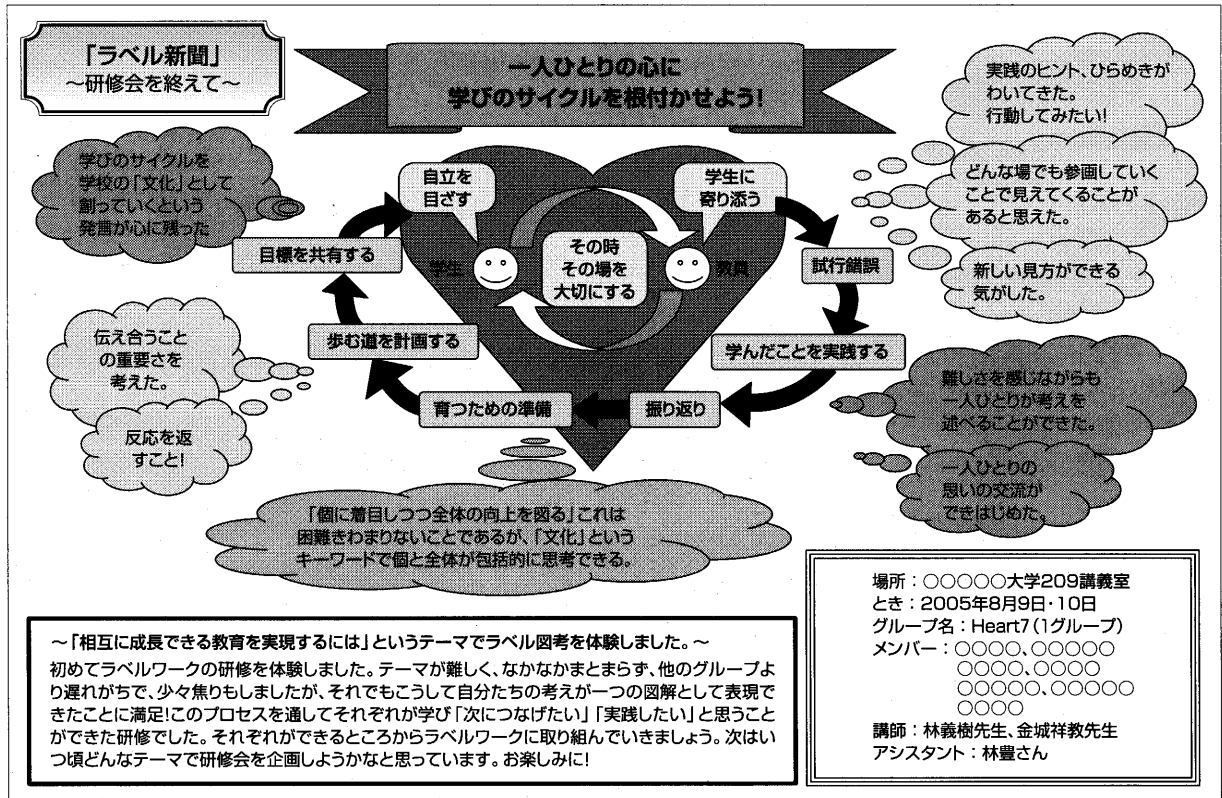
以下、Ⅲ. 研修会の評価Ⅳ. 考察にて述べる。

## Ⅲ. 研修会の評価

### 1. 評価方法

参加者28名に質問紙による自記式アンケート調査を実施した。アンケートの内容は、研修会の内容、ラベルワーク技法に関すること、研修会での学びや気づき、今後への意欲に関してである。各項目は「非常にそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階でたずね、感想等を自由記載とした。自由記載に関しては研修会の感想、ラベルワーク技法の意義、ラベルワーク技法の今後の活用についてカテゴリー化した(表2)。今回の研修会はラベルワー

図1 ラベル新聞「研修会を終えて」



ク技法を用いた参画型研修会であり、参加者全員がはじめての体験であった。参画とはその参加者が計画、実施、反省、伝達を行う主体であるため本報告メンバーを含めて参加者一人ひとりが自ら体験した参画研修について同じように回答してもらった。研修会実施状況とアンケート結果をまとめ、1) 研修会の方法 2) 研修会の内容 3) 研修会の効果、について分析した。アンケート回収率は82% (23名) であった。

アンケートは、自由意志によるものであること、結果は個人が特定できないようにまとめることを文書に明記し、回収をもって同意を得たものとした。本文中の図や写真については口頭にて掲載の同意を得た。

## 2. 評価結果

### 1) 研修会の方法

ラベルワークの研修日程、使用したラベルは表1の通りである。時間配分については講師が当日の進行をみながら変更し、その都度参加者に提示した。講師は演習中言葉掛けを行い、疑問や質問を解決できるように準備していた。アシスタントはラベルの配布や縮小

版を作成する際に使うラベルのコピーなどを行った。

アンケートの結果からは「内容を理解しながらのラベルワーク技法の習得過程は難しい」、「理解が不十分であった」など(6人)という意見があった。プログラムの作業時間や時間配分について、「時間的に余裕があればよかった」、「内容が多い」など(5人)の意見が多く見られた。また事前の準備、ラベル図考のテーマに関しては『ラベル図考のテーマは話やすかった』との設問に関しては23人中{非常にそう思う}が6人と少なく{ややそう思う}が13人{あまりそう思わない}が3人、無回答1人であった。記述からは「段取りよくできるとよいと思った」「具体的なテーマを設定する」と意見がでていた。また一方で「充実した」「楽しかった」など(11人)や「研修会の企画・運営をみんなできてうれしかった」などの多くの肯定的意見がみられた。

### 2) 研修会の内容

『研修は役立つ内容であった』という問いに{非常にそう思う}と答えた人は23人中17人{ややそう思う}6人であった。『内容は期待

に添うものであった』では{非常にそう思う} 9人{ややそう思う}14人で、どちらの設問に関しても{非常にそう思う}と{ややそう思う}をあわせると100%となった。自由記載からは「ラベルワークは有益で有意義な技法である」「すばらしい技法だ」など（5人）という意見があった。また活用に関しても『自己の教育や指導観を整理するのに有効だった』{非常にそう思う}11人、{ややそう思う}11人{あまりそう思わない}1人。『ラベルワーク図考は学生の学びを整理するのに有効と思った』『研修で学んだことを踏まえ具体的に活用してみようと思った』では{非常にそう思う}と答えたのは14人{ややそう思う}と9人でありこの2つの設問においても{非常にそう思う}と{ややそう思う}をあわせると100%となった。自由記載からは「ラベルを活用してみたい」「実践してみたい」など（5人）や「ゆっくりじっくり知りたい」「今後の自己学習を通して理解を深めていきたい」など（3人）今後への積極的な技法活用への意欲が抽出された。研修のテーマである「看護基礎教育においてコミットメント能力と自己評価能力をどう育てるか」の理解に関しては『コミットメント能力の教育的意義について理解できた』では{非常にそう思う}8人、{ややそう思う}13人、{あまりそう思わない}2人。『自己評価能力の教育的意義について理解できた』では{非常にそう思う}2人、{ややそう思う}12人、{あまりそう思わない}9人であった。『コミットメント能力を育てる方法（設計・運営・評価）について理解できた』では{非常にそう思う}2人、{ややそう思う}17人、{あまりそう思わない}4人。『自己評価能力を育てる方法（設計・運営・評価）について理解できた』では{非常にそう思う}0人、{ややそう思う}14人、{あまりそう思わない}9人であった。『コミットメント能力を育てる方法について新たな気付きや学びがあった』{非常にそう思う}5人、{ややそう思う}17人、{あまりそう思わない}1人。『自己評価能力を育てる方法について新たな気付きや学びがあった』の設問では{非常にそう思う}3人、{ややそう思う}14人、

{あまりそう思わない}6人、とあまりそう思わないとの回答が多かった。

### 3) 研修会の効果

次に研修会の効果として、自由記載からラベルワーク技法の7つの意義が見出せた。「みんなが平等に意見を述べられる場をつくることできる」「他の人の話が聞ける」などの抽出ラベルより①伝える・聴く体験ができる（9人）②楽しく興味の持てる学習方法である（7人）「学びのプロセスの整理ができる」「グループダイナミクスによりさらに考えが深めることができる」などから③思考をまとめ、深めることができる（11人）「臨床指導者、学生が共に考えていける」などから④参画力を高める教育方法である（6枚）⑤学びを残すことができる・伝承できる（4人）⑥学びの共有ができる（4人）「一人ひとりの意見を大切にしてお互いが理解しようとするところができる」「メンバーと知り合う、分かり合える機会となる」などから⑦一人ひとりを大切にすることを学ぶことができる（4人）であった。具体的技法利用としては「感想ラベルをまとめる」「感想ラベルからはじめる」など（7人）や「ラベル新聞作成」（5人）「出席カードの工夫」（2人）であった。

今後の活用機会について「実習」や「実習カンファレンス」（14人）でついで「授業」・「演習」・「卒業研究」など（11人）で使用してみたいという意見が多かった。その他「新人教育」・「研修会」など（5人）の卒業教育に関連するものもあった。研修を通して、実際の自分自身の場所から具体的に活用のイメージができていくといえる。

また具体的活用目的としては2通りの目的が見出せた。一つは「個人の学びや成果の整理・知の創造」「学びの共有」で、もう一つは「業務改善」・「学習内容の精選」など（2人）であった。また、実際活用を重ねていくことは有意義ではあるが一方では「飽きてしまうのではないか」という懸念があがっており、その対策として「工夫が必要」「イソップKJ法やワンダーメモを導入すると興味が増すのではないか」との意見があった。

表2 ラベルワーク研修 実施後の感想(自由記載より)

カテゴリー	記述内容	意義	記述内容
研修会の企画・準備・運営について	時間配分		話し合いに参加でき有効な方法だと思う みんなが平等に意見を述べられる場を作ることができる 他の人の意見が聞ける 自分の考えを相手に伝えることができる 体験を言葉にして表現できる いろんな発言ができる 書いたものをもとに話ができる 討議できる 自分の意見を人に伝えることの大切さも実感できる
	研修内容の理解		楽しく面白い気持ちが出る 楽しみながらできる いろんな人の話を聞くのは面白い やりやすい方法 自然に楽しく習得できる 学生も教師も興味ももてる 充実感もあり、達成感も味わえる
	技法の有実後の感想		具体的方法が見出せる 工夫することができる 一人ひとりの意見を大切にしていくことで学びが深まる 学びのプロセスの整理ができる グループダイナミクスによりさらに考えが深めることができる 考えをまとめることができる 概念を関連させ、構成することができる 考えていることが外在化(ラベル)でき、それを手と目で実際に操作していくことができる。 中身を深めることができる 自分の考えを持つことができる
	今後への意欲		学生と双方向の授業を行うための一つの手段として有効 臨床指導者、学生が共に考えていける コミットメント能力を育むための技法としてとても有効 参画力をつけることにつながる
	実施する際のポイント		後で見直すことができる 次の学年に伝えることができる 自分で書き、それが残る
その他	手法に飽きてしまわないか イソップKJ法やワンダーメモなどを利用すると興味が増すのではないか	学びの共 学有る	実習の学びの共有ができる 学びの共有ができる
		一人ひとりに大切にする	一人ひとりの意見を大切に、お互いが理解しようとする ほかの係の人へも手助けしなければという思いが出る メンバーと知り合う、分かり合える機会となる グループメンバー同士の仲間意識も芽生えると思う

## IV. 考 察

## 1) 研修会の方法

アンケートの結果から「内容を理解しながらのラベルワーク技法の習得過程は難しい」、「理解が不十分であった」などの意見があった。このことからなぜ理解が不十分だったのかを研修方法を振り返り考察していく。第一の理由に「時間的に余裕があればよかった」、「内容が多い」などのプログラムの作業時間や時間配分についての意見が多く見られたことから、今回の研修の内容や時間配分は日程

上窮屈だったことがあげられる。日程、時間配分に関して今後改善が必要である。また実質的に日程が窮屈であったということ以外に反省意見として「段取りよくできるとよいと思った」から、参加者が段取りを把握しきれなかったということが「時間不足」となった理由としてあげられる。林はラベルワークを導入するにあたっての大切なことは「それぞれのステップを丁寧にたどっていくこと(林, 2004)」と述べているように、それぞれのステップをどのようにたどればいいのかを事前オリエンテーションで示し、その方向性を各自が理解しながら進めていく必要があっ

た。ラベルワーク導入にあたってのもう一つ重要なポイントとして林はワーカーの存在を上げている。「ワーカーとはファシリテーターの役割をもちその条件として①ラベルワークの楽しさを知っている経験者（がベスト）②学生なら、下級生のラベルワークに上級生がワーカーとして参加する。③一般的なラベルワークの効果を体験的に理解していることが絶対必要である。1グループに1人のワーカーが理想的（林，2004）」と述べている。準備段階でファシリテーター（ワーカー）として配置された検討会メンバーがワーカーとしての条件を満たしておらず、結果役割を果たせていなかったことは「理解が不十分だった」「時間不足」の大きな理由であろう。アンケートでも「グループに（ラベルワークを）知っている人を置く」などがあったように、経験を通してではあるがオリエンテーションの重要性とワーカーの重要性を参加者が十分に認識でき、実践に向けてよい経験にはなっと思われ。

第二の理由に研修会の事前に準備していたテーマが抽象的であったことがあげられる。「ラベル図考のテーマは話やすかった」との設問に関しては「非常にそう思う」が6人と他の設問にくらべ少なかった。ラベルワークをしていくときはテーマの決定も重要な要素である。ラベルワークにおいてテーマは「問い」であり、元ラベル（ラベルワークの最初に、テーマに対して作成するラベル）は「答え」である。抽象的な問いには明確な答えはだせず、ラベル図考の過程において困難感を伴ったであろう。このような困難感からも理解不足を生んだのではないかと考えられる。記述からも「具体的なテーマを設定する」と意見がでており、具体的でイメージしやすいテーマを準備することは今後活用するにあたって大切なポイントであると言える。

また一方で「充実した」「楽しかった」や「研修会の企画・運営をみんなでできてうれしかった」などの多くの肯定的意見がみられ、準備不足で課題の残る企画・運営の研修ではあったが、「理解が不十分」ながらも「充実」した研修であったと評価できる。今回は参画

研修の体験の機会でもあったのだが参加者に参画者たる意識が希薄であったのではないかと思われる。参画とは、「その計画—実行—反省の一連の活動を、後学のものへ伝達するところまで関ること（特に計画、企画の段階から実質的に関ることが重要）（林，2002）。」である。今回特に参画研修の計画段階での課題が残った。

## 2) 研修会の内容

『研修は役立つ内容であった』『内容は期待に添うものであった』の設問では「非常にそう思う」と「ややそう思う」をあわせると100%となった。また自由記載からは「ラベルワークは有益で有意義な技法である」「すばらしい技法だ」などが多く抽出でき、ラベルワーク技法の研修は今後の看護教育においても、また臨床の場においても有意義なものであったと評価できる。また活用に関しての設問でも『自己の教育や指導観を整理するのに有効だった』『ラベルワーク図考は学生の学びを整理するのに有効と思った』『研修で学んだことを踏まえ具体的に活用してみようと思った』に関して「非常にそう思う」「ややそう思う」と答えた人の割合は高かった。自由記載からも「ラベルを活用してみたい」「実践してみたい」などや「ゆっくりじっくり知りたい」「今後の自己学習を通して理解を深めていきたい」などが見られ、今後具体的な活用への意欲につながる研修であったと評価できる。今回の研修参加者は看護系教員（大学、短期大学、専門学校）、実習病院の臨床指導者と、学生の教育に携わっている人でおかつ、この研修会のテーマや技法に興味をもって参加していたために知識の吸収や、意義の見出しにおいて積極的な姿勢であったということも考えられる。今後導入にあたっては場面や集団に応じて有意義な技法であるように工夫も必要であると思われる。

研修のテーマである「看護基礎教育においてコミットメント能力と自己評価能力をどう育てるか」の理解に関してはコミットメント能力の教育的意義の理解、コミットメント能力を育てる方法の理解、新たな学びや気づき、自

己評価能力の教育的意義の理解,自己評価能力を育てる方法の理解,新たな学びや気付きについての設問の回答から研修を通してコミットメント能力を育てる意義の理解,方法の理解は深まったと思われるが,自己評価能力を育てる意義の理解,方法の理解までつながりにくかったといえテーマが十分達成できなかったと評価できる。次回に向けての課題として,特に自己評価能力を育てることに対する理解をいっそう深める努力と新たな気付きがあるような研修へとつなげる必要がある。

### 3) 研修会の効果

次に研修会の効果について考えるにあたって,ラベルワーク技法そのものの有効性や意義について考察していきたい。自由記載からラベルワーク技法の7つの意義が見出せたが,この抽出された意義は言い換えれば技法の魅力である。"伝える,聴く体験ができる"なおかつ"楽しく学べる方法"であり,"思考も深まる""学びの共有""一人ひとりを大切にすることが出来る"ということであり,また教員や指導者の立場を超えて一緒に"参画"していくことができ同時に一人ひとりの"参画力"も高めることができる方法であるということは活用するにあたってかなりの効果が期待できると言ってよいだろう。また「人格力を引き出す方法として,また組織力を高める方法として,このラベル思考はきわめて有効である(林,2002)。」と述べられているように,ただのラベル(自分の書いた意見,一義の文章)がラベルワークを通して,じっくりと吟味され貴重な意見として尊重され大切に扱われる,またグループが同じであるともちろんだが違ったとしても人と人を結びつける役目も果たす。そしてただのラベルが大切な一枚となる空間においては,口頭の発言も重みをますようになりそこは参画的空間と変化するという二次的な効果も期待できる技法であると思われる。

具体的技法利用としては「感想ラベルをまとめる」「感想ラベルからはじめる」や「ラベル新聞作成」「出席カードの工夫」などまずは取り組みやすい技法からはじめるという意見が多く見られた。

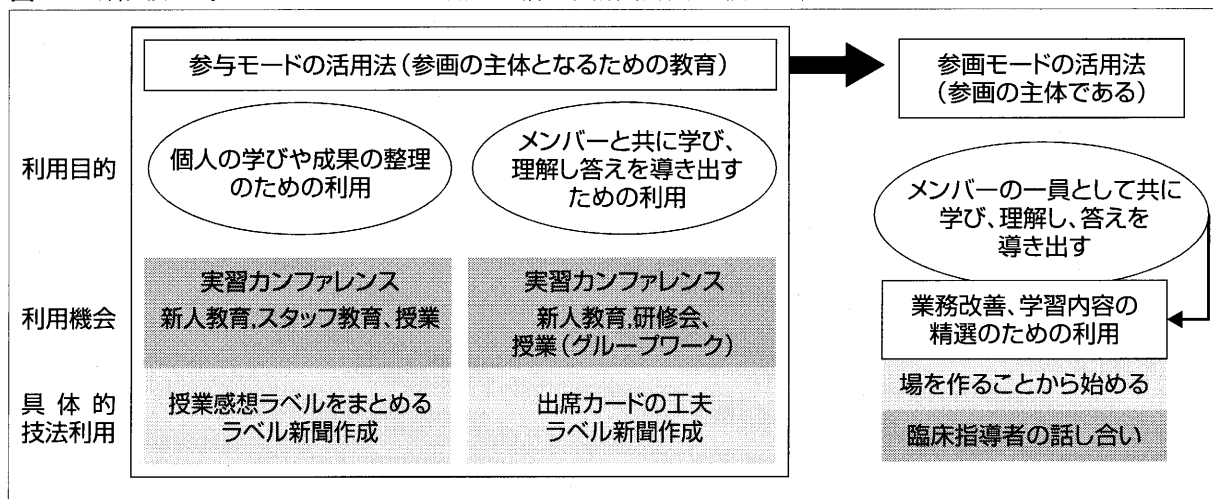
今後の活用機会については「実習」や「授業」・「演習」・「卒業研究」などで使用してみたいという意見が多かった。その他「新人教育」・「研修会」など卒後教育に関連するものもあった。研修を通して,自分自身が実際に活動している場所から具体的に活用のイメージができていくといえる。

また具体的活用目的としては2通りの目的が見出せた。図2に表したように,一つ目の目的である「個人の学びや成果の整理・知の創造」「学びの共有」などはラベルワーク技法の経過の時点でほぼ目的が達成される。言い換えれば参画型授業の形態で,「参画する主体」となるための教育を目指したものであり,自分自身(教員または指導者)は参与しているという立場である参与モードの活用法であるといえる。また二つ目の目的としてあがった「業務改善」や「学生と共に学習内容の精選」は自らが自分自身のための目的や目標をもって取り組みメンバーの一員となり,場を作ることからはじめ,経過も重要ではあるが,最終的に答えを出すことで目的が達成される。これは自分自身が「参画する主体」となった,参画モードの活用法であると捉えることができる。林は「学びを参集型→参与型→参画型へと進展させることで知の深度を知識→認識→意識へと深める力をつける。それにより,学びを受容型→形成型→活用型へと発展させる(林,2002)。」としている。参与モードの活用法により「参画する主体」を目指した教育をうけた者は,知の深度を深め「参画する主体」となって自ら学び,自ら考えていくことが可能となるだろう。よりよい答えを導き出すための参画モードの活用によりよい影響を与えることのできる効果的な技法であるといえる。(図2)

また,実際活用を重ねていくことは有意義ではあるが一方では「飽きてしまうのではないか」という懸念があがっていた。「他施設の人との意見交換は有意義」という意見もあるように今回はあらゆる意義を見出せたが,同じことが続くと思考の偏りや行き詰まりなどの可能性考えられる。新しい風を吹き込む役割をもつゲストの配置も重要な工夫のひとつ



図2 研修後に考えたラベルワーク活用の構想図解(自由記載より)



つであると思われる。また実際に基礎看護技術実習で使用した林ら(林他, 2002)によると「ラベルケーションをはじめたばかりの学生達にとっては、ラベルに記入することが新鮮であり、その内容は生き生きしたものが多いが後半になり慣れてくると、学生の一部で儀礼的、形式的な内容が提出されてくるようになった。」と述べている。そのため実施をするにあたって、興味を持続させるための工夫が必要となってくると思われる。「オリエンテーションを強化し、目的や方法を十分に理解させることが大事で初回だけでなく、折りにふれ実施していくことが重要である」と述べており、ラベルワークに参加するものにとって、その思考過程が自分自身にとって重要なのだと感じることが重要であろう。

またラベルワークは「ラベルに書く」ことに始まる。ラベル記入一項目の原則があり一義化の原則がある。すなわち「ラベルが語、でも句、でもなく、文(30字~50字以内:一義)であることによってラベルを書いたその人の解説なしに固定した意味をもつことができる」(林, 2002)ということである。それを守ればラベルはいろんな交流を可能にしてくれる。ラベルに書くということ事体は目新しいものではないが「KJ(Kawakita Jiro)法、BD(Business Design)法、NM(Nakayama Masakazu)法などを参考にしながら、細かな手技にとらわれ過ぎず、ラベル図考技法の普遍構造モデルを活用し誰にでも図考技法の創造を可能にしている。自分の思考を助ける

〇〇法を開発していくべきである(林, 2004)。」という技法である。このことはラベルワーク技法には大きな可能性があるということを示している。テーマや場所や集団によっていろんな意味を持たせることが可能なため、目的をはっきりさせた上で方法を工夫すれば「飽きてしまう」のを防ぐことができると思われる。今回のアンケートでも意見として抽出されたが各種ソフト(イソップKJ法、インスピレーション、ワンダーメモなど)のコンピューター上でのラベルの使用や新たな取り組みであるインターネットや携帯電話を通じての活用も、マンネリ化を防ぎ範囲も大きく広がったラベル交流が期待できるだろう。

今後、技法導入の第一段階として個人が各領域においてラベルワーク技法を実践していく予定だが、実施科目や実施機会が増加してくると実施するテーマや内容が重なる可能性がある。そのようなことに陥らないよう継続的に活用するにあたっての課題として、ラベルワーク技法の新たな可能性を模索し工夫すること、学内でラベルワーク技法をどの時期にどのような方法で活用したら効果的なのかを検討することが必要である。最後に、この研修会は「楽しい」という気持ちを参加者がもてたということが大きな学びであり、ラベルワーク技法の積極的な導入への意欲につながったと思われる。今後導入・活用の過程においても様々な課題が表出すると思われるが、それぞれが自分流のラベルワーク技法を楽しんで工夫・構築できるように検討会や研修会

を重ねていきたい。

## 謝 辞

こころよく作品掲載を了解して下さった研修会参加者の皆様，ラベルワークについて丁寧に根気よく教えていただきました林義樹先生，金城祥教先生，そしてアシスタントしてくださいました林豊さんに心より感謝いたします。

\*本研究は島根県立看護短期大学の平成17年度特別研究費により行われた。

## 文 献

- 林牧子,村上愛子,岡本寿子 (2002) : 基礎看護技術におけるラベルワークの成果と学生の反応, 京都市立看護短期大学紀要, 27, 121-130.
- 林義樹 (2004) : 看護の知を紡ぐラベルワーク技法, 29-79, 精神看護出版, 東京.
- 林義樹 (2002) : 参画教育と参画理論-人間らしい『まなび』と『くらし』の探求, 8-270, 学文社, 東京.
- 夏目みつ子, 林美沙, 沼倉リエ, 佐藤道子 (2004) : ラベルワークをより効果的なものとする学生参画型授業の実際, 看護教員と実習指導者, 1 (3), 47.

## Using Label Work Technique to introduce nursing fundamentals to students

Chiaki INOUE, Teruko ISHIBASHI, Yuichi IIZUKA, Minae AGO,  
Mieko TAKAHASHI, Yuri IYAMA, Momoko IITHUKA

### Abstract

We are concerned with educating nurses who can think, judge, and practice independently. To this end, we held a seminar for Sankaku education to help enhance participant's abilities in the areas of commitment and self-evaluation. In the seminar, label work technique was introduced. There were problems of theme for label chart arrangement and time management to be solved. Subsequent evaluation by questionnaire showed that the seminars proved significant. Overall, we found label work technique to be a worthwhile method to introduce students to basic education for nursing.

**Key Words and Phrases:** basic education for nursing, commitment (SANKAKU), Label work,